

第6章 総括

山持遺跡は、縄文時代から近世の遺構・遺物が確認される複合遺跡で、土層の堆積段階により複数の遺物包含層や遺構面が存在する。東林木バイパスの建設に伴う山持遺跡の発掘調査は、平成14年度から22年度の9か年にわたって行われたが、本書はこれらの最終の報告となるものである。本章では6・7区に加え、他の調査区の成果も検討し、総括することとしたい。

第1節 山持遺跡の変遷

山持遺跡は山持川流域に東西2kmにもわたる広大な遺跡で、北山山塊から南の平野部へ突出した伊努谷扇状地により大きく東西に分けることができる。伊努谷扇状地の東側については1~3区で発掘調査が行われており、その様相は『山持遺跡Vol2』(島根県教育委員会2007a)にまとめられている。ここでは伊努谷扇状地よりも西側について、各時代の様相を見ていくこととしたい。

1. 弥生時代後期中葉以前（第209図）

6区では、縄文時代～弥生時代後期の遺物を含む砂礫層を確認している。この層は、主に花崗岩質の砂礫で組成され、斐伊川の堆積作用によって形成されたと考えられる。出土遺物で最も新しいものはV-2様式に相当し、砂礫層の堆積時期は後期中葉と判断できる。6区の南側の山持川川岸遺跡（出雲市教育委員会1996）においても花崗岩由来の粗砂が下位に堆積しており、斐伊川からもたらされたものと考えられている（中村1996）。

これよりも西の7区では、7区⑤で花崗岩を起源とする粗砂層を確認しており、7区⑥では灰色シルト層中に弥生時代後期前葉の土器群が存在し、この土層を切るかたちで東西方向にのびる旧河道（SR01）を検出している。ここでは少量ながら弥生土器片が出土しており、最も新しい遺物は後期中葉に位置付けられ、6区砂礫層と時期的に対応する。堆積層には花崗岩起源の粗砂も見られることから、6区周辺を流れた河道の一部が分流した可能性が考えられる。

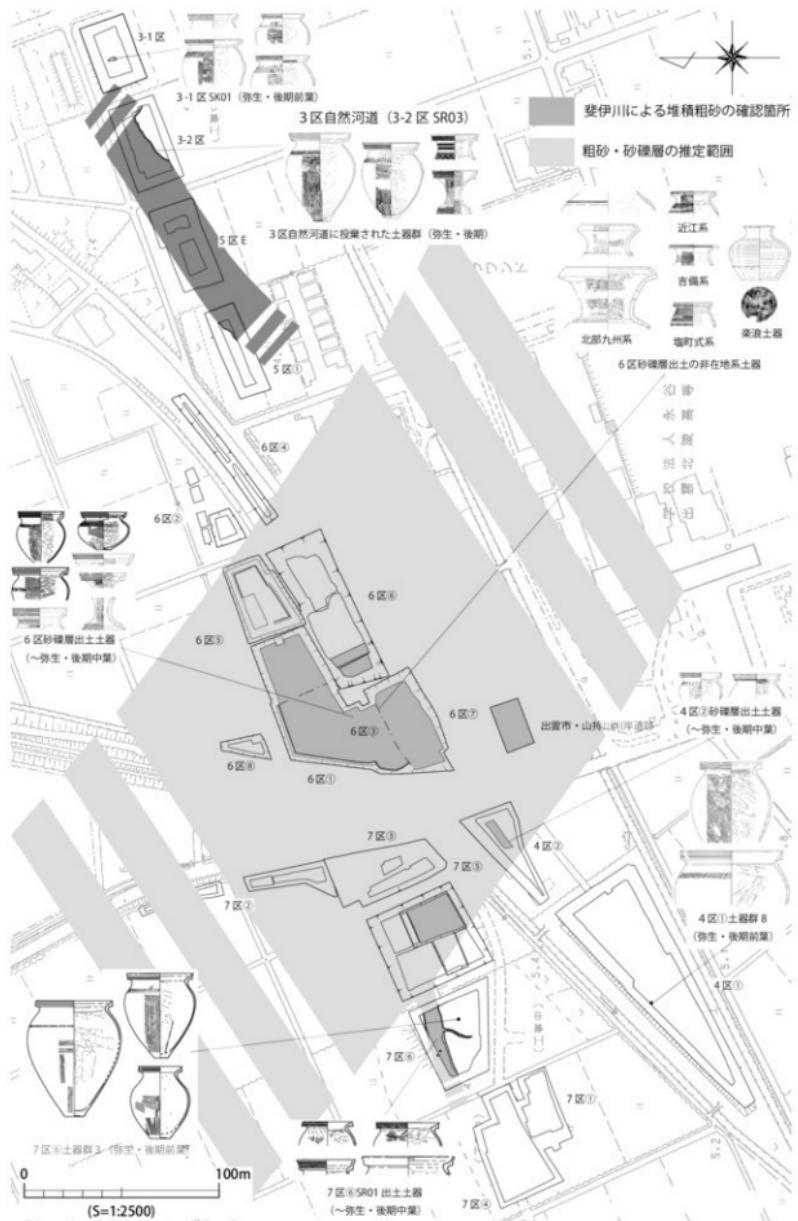
4区については、4区②では6区と同様の砂礫層が確認されたが、4区①の北側では弥生時代後期前葉の土器群8が存在し、少なくともこの地点は斐伊川の堆積作用を受けていない。

以上を整理すると、弥生時代後期中葉の斐伊川の堆積は6区周辺の大部分に及んでおり、そこから西側では河道の一部が7区の北側へ向けて分流したこと、4・7区では斐伊川の堆積作用を受けていない部分があったことが分かる。4・7区において後期中葉以前の遺物の出土は散発的であり、集落からはずれた位置にあったと判断される。

さて、砂礫層中には縄文時代～弥生時代後期中葉の遺物を含んでいるが、これらがどこからもたらされたのか、この時代の遺跡がどこに存在したのか、ということについて考えてみたい。

砂礫層は斐伊川の堆積であることから、大きく見て東から西への流れがあり、砂礫層に含まれる遺物は本来は6区よりも東側に存在したものが水流によって運ばれたと推測される。

6区から約250m東側の3区では、弥生時代後期前葉の土坑（3-1区SK01）や、弥生時代中期中葉～弥生時代後期末の遺物を伴う自然河道（3-2区SR03）が検出されている。また、5区においても弥生時代後期前葉～古墳時代前期初頭頃の土器が出土しており、3-2区SR03に続く河道が存在したと考えられている。こうしたことから3・5区では後期前葉以降は斐伊川の水流を直接受けることはなかつたといえる。この調査区では建物跡など集落の中心部を示すような遺構は確



第209図 山持遺跡3～7区 弥生時代後期中葉以前の様相

認されていないが、3・2区 SRO3 では南岸に沿って大量に土器が投棄されていたことから、集落の中心はこれよりも南側に位置したと推測される。この集落跡の一部が斐伊川の水流によって削られ、そこに含まれた遺物が6区にもたらされた可能性が高いと考える。

この時期の遺物には、北部九州系、吉備系、塩町式系、近江系など非在地系の土器が認められ、中には朝鮮半島系の楽浪土器も存在する。これらについては山持遺跡が出雲平野における対外交流の窓口としての役割を果たしていたことを示すものであり、次節で検討したい。

2. 弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭（第210図）

3・5区ではそれ以前とあまり位置を変えずに河道が存在する。3・2区 SRO3 では草田3～5期の土器が出土しているが、草田3期のものが多く、これ以降は減少している。

6区では、シルト層上部に堆積した黒色粘質土層に草田3期以降の遺物が含まれており、出土量は草田5期にピークを迎える。遺構は、掘立柱建物跡や竪穴建物状遺構、溝・流路跡、土坑などが検出され、掘立柱建物の中には盤盤を作う布掘建物もあった。また、製作途中の木製品を水漬にした遺構も認められた。これらのほとんどは草田4～6期のものと推定される。この南側の山持川川岸遺跡においてもこの時期に掘立柱建物跡、竪穴建物状遺構、土坑、土器群が検出されており、この一帯に当該期の集落が展開していたことが分かる。

6区は布掘建物や製作途中の木製品を水漬けした遺構の存在から居住域ではなく、貯蔵・生産域と考えられる。集落の構造は、倉庫などの機能を持つ掘立柱建物と貯蔵穴もしくは廃棄土坑群などで形成された単位が複数集合していたものと推測される。

竪穴建物状遺構は6区④と山持川川岸遺跡で検出されたが、いずれも柱穴を持たないものであり、また、遺跡が低地に位置していることから、住居として構築・利用されたものか疑問がある。集落における居住地がどの部分にあったのか現状では不明確であるが、遺構検出面の標高は6区⑥では2.0～2.4mであるのに対し、南の山持川川岸遺跡では2.8mとやや高く、地盤も安定していると考えられることから、6区の南側に営まれていた可能性が高い。

6区⑤から6区⑥の北東にかけては、南東～北西方向に流路跡が2条存在し、その方向性から東側は6区②・④の間、もしくは6区④・⑥の間を流れていたと推測される。6区④・⑥の間を流れていたすれば、3・5区で確認された流路と連続していたということも考えられる。

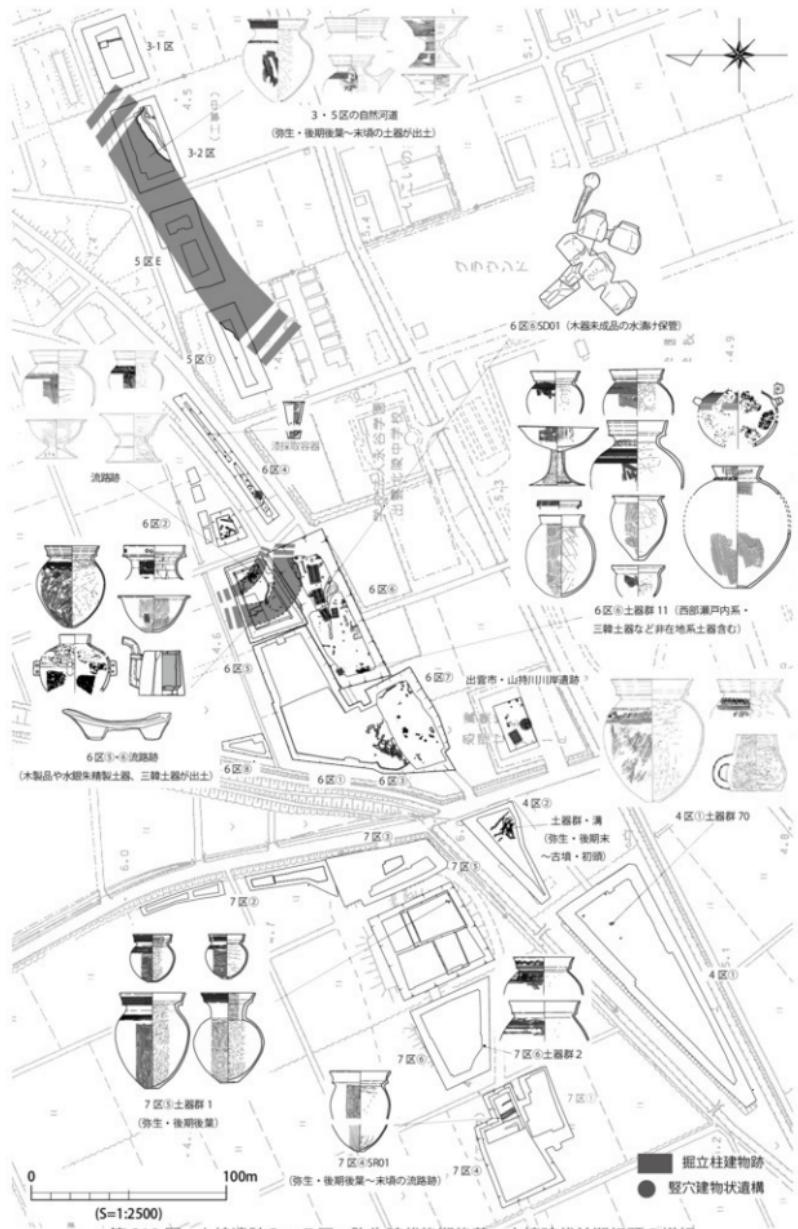
西側の4・7区では土器群が散発的に存在するが、全体としてこの時期の遺物・遺構は少なく、集落からはずれていたようである。ただし、7区④では杭列を作う南北方向の流路（SDO1）が確認されており、この周辺で水田の開発が行われたということも考えられる。

この時期の出土遺物には、木器未成品や漆採取容器のような生産関連遺物や、水銀朱精製土器や石杵のような特殊な用途をもつもの、三韓土器や西部瀬戸内系、中国山地系など非在地系の土器も見られ、この地が交易や生産の拠点であったことを示している。

3. 古墳時代前期～後期（第211図）

6区よりも東側では古墳時代前期（草田7期）以降は遺物が急減し、明確な遺構は存在しない。一方、西側の4区①では、古墳時代前に大溝が掘削され、大量の土器が投棄されている。厳密な時期は不明確だが、掘立柱建物もこの時期から建てられたと考えられ、6区から集落が移転したことが分かる。7区では、7区④に溝（SDO1）がある以外に目立った遺構は存在しない。

古墳時代中期には、4区①では井戸・土坑、溝などがあり、建物も存在した可能性は高く、集落



第 210 図 山持遺跡 3~7 区 弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭の様相

は継続していると考えるべきであろう。7区では、7区③・⑤では南北方向の流路跡、7区⑤・⑥では土師器・須恵器などを伴う落ち込み状の地形、7区①では溝や井戸・土坑が認められる。遺物量もかなり増加しており、井戸の存在から付近に居住空間があった可能性も考えられる。

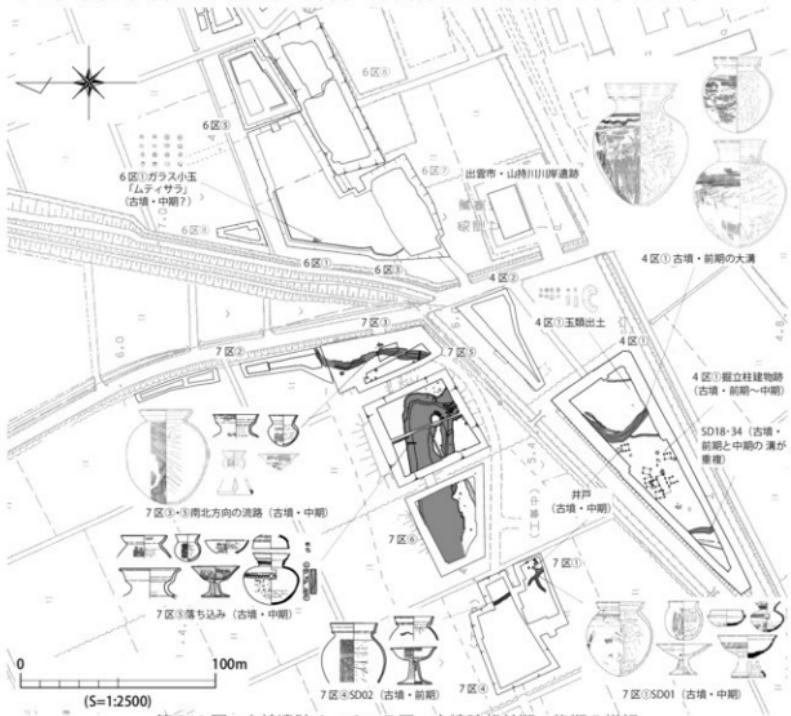
古墳時代前期～中期の遺物として、4区①では調査区の東側で碧玉製管玉・滑石製の勾玉・管玉・白玉・ガラス製の勾玉・管玉・小玉などの玉類が、7区⑤の落ち込み状地形では須恵器・赤彩土師器などとともに碧玉製管玉・ガラス小玉が、6区①でも赤褐色のガラス小玉「ムティサラ」が出土しており、何らかの祭祀行為に伴うものと推測される。

古墳時代後期にはどの調査区でも、遺物が乏しく、遺構も認められないことから、少なくとも調査区域には集落は存在しなかったと断定できる。

4. 古代～中世初頭の遺構（第212図）

6区①・③・⑦では、8世紀後葉を中心とする時期に南北方向にのびる道路遺構が構築されている。この道路遺構は、旧河道部分に大規模な盛土を施して構築されたもので、盛土以前の旧河道堆積層や、盛土中、盛土後の堆積層から墨書き土器・木簡などを含む遺物が出土した。中には吉祥天女を描いたとされる板絵もあり、道路の構築等に伴い仏教祭祀が行われたと推測される。

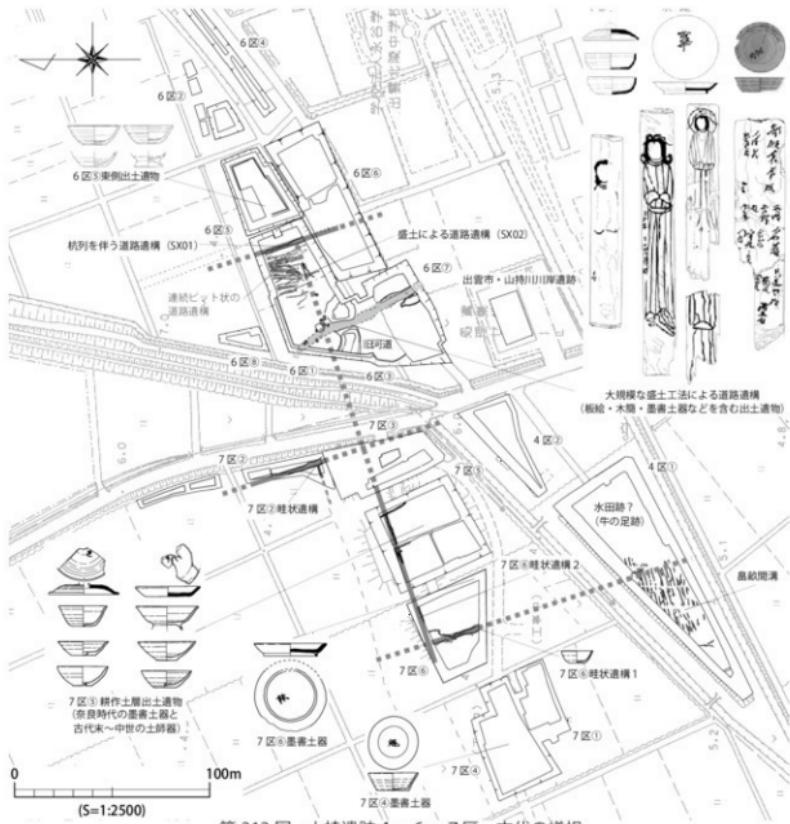
この東側の6区⑤では南北方向にのびる連続ピット状の道路構造が幾筋もの列をなして検出された。時期は不明確だが、検出面から奈良～平安時代のうちに形成されたと考えられる。



第211図 山持遺跡4・6・7区 古墳時代前期～後期の様相

奈良時代の遺物は、道路遺構周辺以外では少なく、この時期の明確な遺構は存在しないことからこの周辺は水田などの耕作地として利用されたと考えられる。なお、7区では奈良時代の墨書き土器3点と、平安時代（10世紀代）の墨書き土器1点が出土している。

平安時代後半～中世初頭の遺構は、黒色腐植土層の直下で、6区⑤・⑥で杭列と畦状の盛土を伴う南北方向の道路遺構（6区⑤SX01、6区⑥杭列4・5）と、これと直交する東西方向の道路遺構（SX02）が、7区②で南北方向にのびる幅の広い畦状遺構とこれに直交する幅狭の畦状遺構が、7区⑥では南北方向と東西方向の2条の畦状遺構（畦状遺構1・2）が確認されている。6区⑤SX01と、7区②畦状遺構、7区⑥畦状遺構1はいずれもN-20°Wの方向にのびて平行しており、これらの間隔は110m前後でほぼ1町に相当する。また、6区⑤と7区⑥畦状遺構2とは直線的な位置関係で、この間の6区①、7区⑤の調査区土層壁面にも両者を結ぶライン上で畦状の高まりが認められることから、一連のものと理解できる。以上のことから、これらの畦状遺構（道路遺構）は条里地割に基づいて形成されたものと推測される。なお、南側の4区①では7区⑥畦



第212図 山持遺跡4・6・7区 古代の様相

状遺構2の延長線を境に、東側では牛の足跡が多数検出された推定水田跡、西側では畠地に分かれており、この部分も同じ地割によって区画されていた可能性がある。

これらの年代については、7区⑥畦状遺構1の直上で11世紀代の土器が出土しており、6区⑥杭列4の放射性炭素年代測定では暦年較正年代で902AD～915AD、969AD～1029ADという結果が得られている。また、腐植土層下面や耕作土層には、6区⑤東側で12世紀代の土師器が、7区⑤では11～13世紀古相の土師器が出土している。このことから、条里地割の上限は10～11世紀代にさかのぼり、13世紀代を下限に水田耕作・農地の經營がなされたと考えられる。

5. 中世後半～近世初頭（第213図）

中世には山持遺跡周辺は湿地化しており、黒色腐植土層が堆積している。3区及び6区①・③では黒色腐植土から卒塔婆状木製品が出土しており、周辺で葬送儀礼がされたと考えられる。

この上層では、6区から4区にかけて北東～南西方向の河道路跡を確認している。この河道路は、現在自然堤防上の高まりとなっている市道に沿って流れているものと想定され、この地点の北東にある伊努谷から流れ出る「伊努谷川」の旧河道であった可能性がある。中世後半～近世初頭頃と推定される河道堆積層から木製品や鉄製品などの遺物が出土しており、この中には2体分の人骨や卒塔婆状木製品もあったことから、河道の周辺で葬送儀礼が行われたと推測される。

中世においては遺体を土中に埋葬せずに、路辺や川べりに放置・遺棄されることは一般的に行われていたことが文献史料で明らかにされている（前嶋2007）。また、考古資料からも、遺体を川辺に葬り、葬送木簡や供物を入れた漆器椀等を伴う相応の葬送儀礼を行っていた状況が確認されている（水沢2007）。本遺跡の黒色腐植土層や河道路出土の卒塔婆状木製品や人骨などもそうした状況を示すもので、当該期の葬送儀礼や死生観を研究する上で貴重な資料といえよう。

第2節 山持遺跡の掘立柱建物跡について

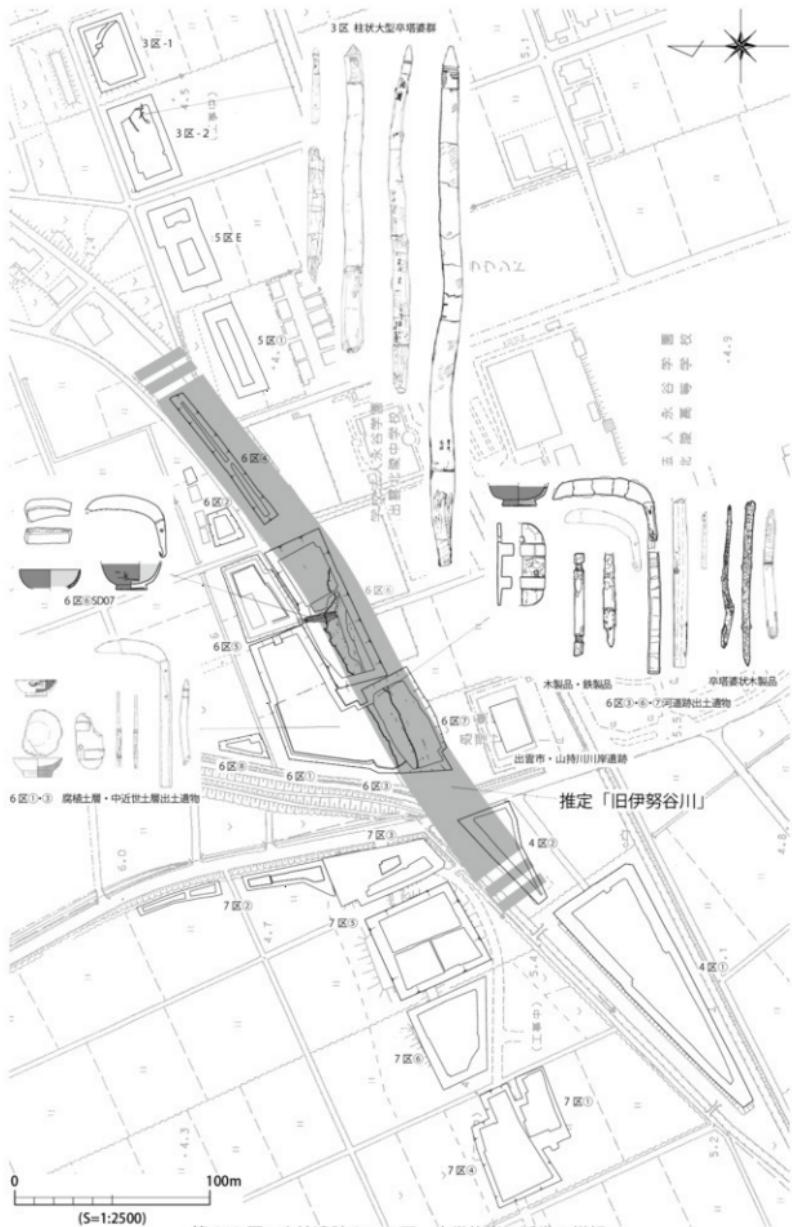
山持遺跡では、弥生時代後期末～古墳時代中期の掘立柱建物跡が13棟検出された。6区⑥と山持川岸遺跡の建物跡は弥生時代後期末～古墳時代初頭頃に、4区の建物跡は古墳時代前期～中期に属すると考えられる。6区⑥では、布掘建物で礎盤を伴う特殊なものも存在する。ここでは、これらの建物跡について類例を挙げるとともに、その構造について検討したい。

1. 建物跡の平面形・規模

山持遺跡の掘立柱建物跡について第3表にまとめた。建物の形態は、梁行1間×桁行2間のもの

第3表 山持遺跡掘立柱建物跡一覧

調査区	遺構名	柱間	梁行(m)	桁行(m)	主軸方向	備考
6区⑥	SB01	1間×2間	2.5	5.3	N-73°-E	布掘建物。全ての柱根残る。礎盤あり。
6区⑥	SB02	1間×?	2.9	(7.9)	N-81.5°-E	布掘建物。桁行は振り方の長さ。
6区⑥	SB03	1間×2間	1.9	3.8	N-85°-E	5か所で柱根残る。
6区⑥	SB04	1間×1間	1.5	1.5	N-58°-E	全ての柱根残る。
6区⑥	SB05	1間×3間	2.2	4.0	N-56.5°-E	布掘建物。一部に柱根や礎盤残る。
4区①	SB01	1間×2間	3.4	4.0	N-10°-W	
4区①	SB02	2間×2間	3.2	3.6	N-18°-W	
4区①	SB03	1間×2間	3.7	4.5	N-79°-E	
4区①	SB04	1間×4間	4.5	9.6	N-67.5°-E	東端の梁行は3.7m。南西隅の柱穴を欠く。
4区①	SB06	1間×2間	3.0	3.5	N-21°-W	
4区①	SB07	1間×1間	3.0	3.6	N-15°-E	
4区①	SB09	1間×2間	2.8	3.2	N-6°-W	
山持川岸	SB01	2間×4間	3.1	5.0	N-17.5°-E	建物内の2か所に東柱



第 213 図 山持遺跡 3~7 区 中世後半~近世の様相

のが多く、そのほかも梁行1間のものがほとんどだが、4区①SB02と山持川川岸SB01は梁行2間で、山持川川岸SB01は建物内に2か所の東柱を持つ。

4区①の建物跡は、6区⑥や山持川川岸のものと比べると総じて柱間距離が大きく、梁行は3mを超えるものがほとんどである。このことは両者の時期差を反映しているのかもしれない。

2. 布掘建物について

6区⑥SB01・02・05は溝状の柱掘り方を持つ布掘建物であった。布掘建物は島根県内では12遺跡27例が確認されており、ほとんどは弥生時代後期～古墳時代初頭に属するもので（松江市教育委員会2011）、本遺跡もその例に漏れない。建物跡の平面形態は、本遺跡例のように梁行1間の長方形プランのものが多いが、松江市後廻遺跡のように梁行が2間で、正方形に近いものも存在する。建物の立地状況も、本遺跡例のように低地に位置するものがあるが、後廻遺跡例などのように丘陵上に建つものもある。建物の下部構造についてみると、掘り方を通して礎盤を設けている例は島根県内では今のところ未確認で、6区⑥SB01・05、出雲市門前遺跡（出雲市教育委員会2006）は柱個別に礎盤を持ち、溝状の掘り方を掘る意義は見出しづらい。強いて挙げるなら、個別に柱穴を掘るよりも布掘状に掘る方が柱の筋や間隔をそろえやすい、というところであろうか。

以上のように、布掘建物に平面形態や立地状況に共通性はなく、通常の掘立柱建物との相違点も現状では柱掘り方の形状以外には見出しがたい。ただし、布掘建物の時期がほぼ弥生時代後期に限定されることや、掘立柱建物跡の全体数からみると少数例しか確認されていないことは布掘建物の特殊性を示すものとも考えられる。

3. 硏盤について

6区⑥SB01は、いずれも柱下端の抉りに横木がはめ込まれ、さらにその下に枕木が敷かれてた。6区⑥SB05では、礎盤を持つ柱と持たない柱があった。礎盤材は、丸太材を半蔵もしくはミカン割りしたもので、柱との接続するための加工はされておらず、礎盤の上に柱が直接のっていた。中には礎盤の下に別の丸太材を敷き並べたものもあった。

島根県内ではこのほかに当該期の礎盤を伴う建物跡は、前述の門前遺跡例がある。長さ60cm前後の棒状もしくはやや厚みのある板状の礎盤材が4つ検出されたが、いずれも側面には柱と連結させるための加工は見られず、柱を受けるために上面中央を崖ませているものもあった。このことからSB05と同様に礎盤の上に柱が直接のっていたと考えられる。

SB01のように柱根に抉りを入れて横木を連結させるものは、佐賀平野で76例（木島1994）、福岡県平塚川添遺跡（甘木市教育委員会2001・2004）で約20例、福岡県蒲船津江頭遺跡（福岡県教育委員会2009・2010・2011）で約120例と西北九州で多く、弥生時代中期～古墳時代前期にかけて存在する。ただし、弥生時代中期に、石川県戸水B遺跡（石川県立埋蔵文化財センター1994）や大阪府瓜生堂遺跡（瓜生堂遺跡調査会1973）にもあり、事例数に差はあるものの広く普及した技法と考えられる。なお、6区⑥SD01では下面に抉りが施された柱材（71-34）が出土しており、本遺跡ではSB01のほかにも同様の礎盤を持つ建物が存在した可能性は高い。

1 石川県近畿遺跡（石川県教育委員会2004）では布掘建物の掘り方に細長い板材を通している例が確認されている。

2 門前遺跡の礎盤材の形状については、出雲市文化財課 岸道三氏より御教示を得た。

3 SB01の礎盤形態は、木島氏の分類ではⅢa類（柱材下端部及び横木中央部に欠き込みをつくり、これらを組み合せて設置するもの）に相当し、木島氏の集成からⅢa類の礎盤を持つ建物跡を抽出した。

4. 6区⑥SB01の上部構造と性格について

6区⑥SB01の上部構造は、①西側の柱は傾いた状態で立っていたが、ほかの柱は直立していたこと、②天地逆に柱材を用いたものがあることから、通柱式の建物ではなく、東柱式の建物の可能性が高いと考える。通柱式建物の場合、地面から屋根まで柱が通り、梁・桁材などとも連結しているため、1本の柱が傾けば他の柱も連動して傾きが生じやすい。また、天地を逆に柱を立てた場合、基部と上端では太さの差が大きくなり、建物の重心はそれだけ不安定になるからである。なお、6区⑥SB05も、天地を逆に立てた柱があることから東柱式建物の可能性が高い。

SB01は、上部構造のほかにも、通常の建物と比べ太い柱を持つこと、礎盤を設けていることも特徴に挙げられる。こうした構造は、建物そのものに加えて、建物内の積載物の負荷に対する耐久性を意図したものであり、この建物は倉庫として利用されたと推測される。

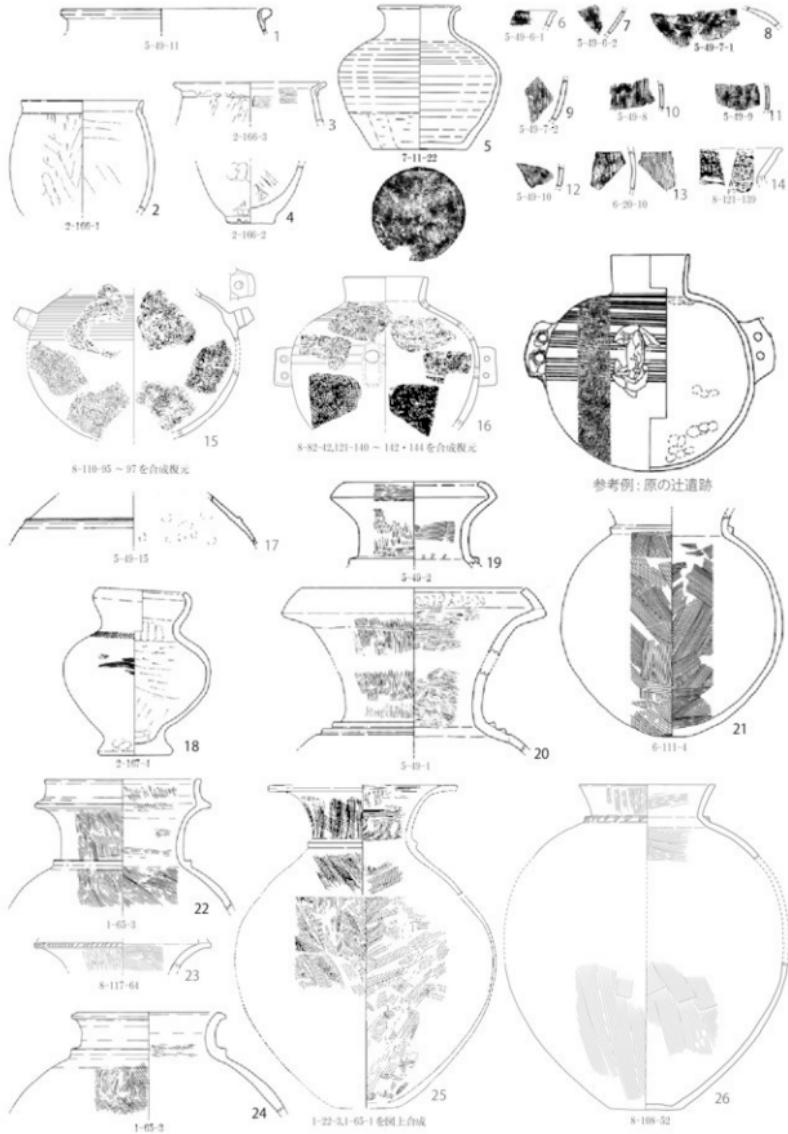
なお、SB01の掘り方の埋土中で、柱根の付近から赤色顔料の付着した石(51-4)が出土しており、建物構築時に地鎮等の祭祀行為が行われたと考えられる。また、柱材はすべてカヤ属の材を用いているが、建物の全ての柱で同一樹種が用いられるのは珍しいこととされ、こうした点についてもこの建物の特殊性を見出すことができる。

第3節 山持遺跡の非在地系土器について

これまでの調査で、山持遺跡では弥生時代中期から古墳時代前期初頭にかけて多くの非在地系の土器が出土している。これらは本遺跡が出雲平野における他地域との交流の拠点であったことを示すとともに、交流の内容について知る手がかりとなるものである。ここでは、本遺跡の非在地系土器について主なものを第214・215図に提示し、その様相を概観したい。

朝鮮半島系（1～16） 1は擬朝鮮系無文土器で、水石里式に相当する。6区砂礫層から出土したもので、弥生時代前期後半～末頃に属すると考えられる。2～4は勒鳥式の甕で、3区SR03から出土している。中期後半～後期のものとみられる。5～14は楽浪土器で、5～13は6区砂礫層から出土したもので中期後葉～後期中葉に属し、14は6区⑥のシルト上層の黒色粘質土で出土した資料で、後期後葉まで下る可能性がある。5はほぼ完形の短頸甕で、こうした形で残るものには北部九州でも珍しい。6～14も小片であるが短頸甕と考えられる。15・16は三韓土器の両耳付短頸甕である。15は、耳に縱方向の穿孔を持ち、底部が丸底のもので、忠清南道の系統と考えられる。6区土器群11で出土しており、草田5期を中心とする時期に位置付けられよう。16は横方向の2つの穿孔を持つ耳が2か所、環状の把手が1か所付くものである。慶尚道に見られる器形で、国内では長崎県原の辻遺跡に類例がある。6区⑥SD03上部などで出土しており、古墳時代前期まで下る可能性もある。

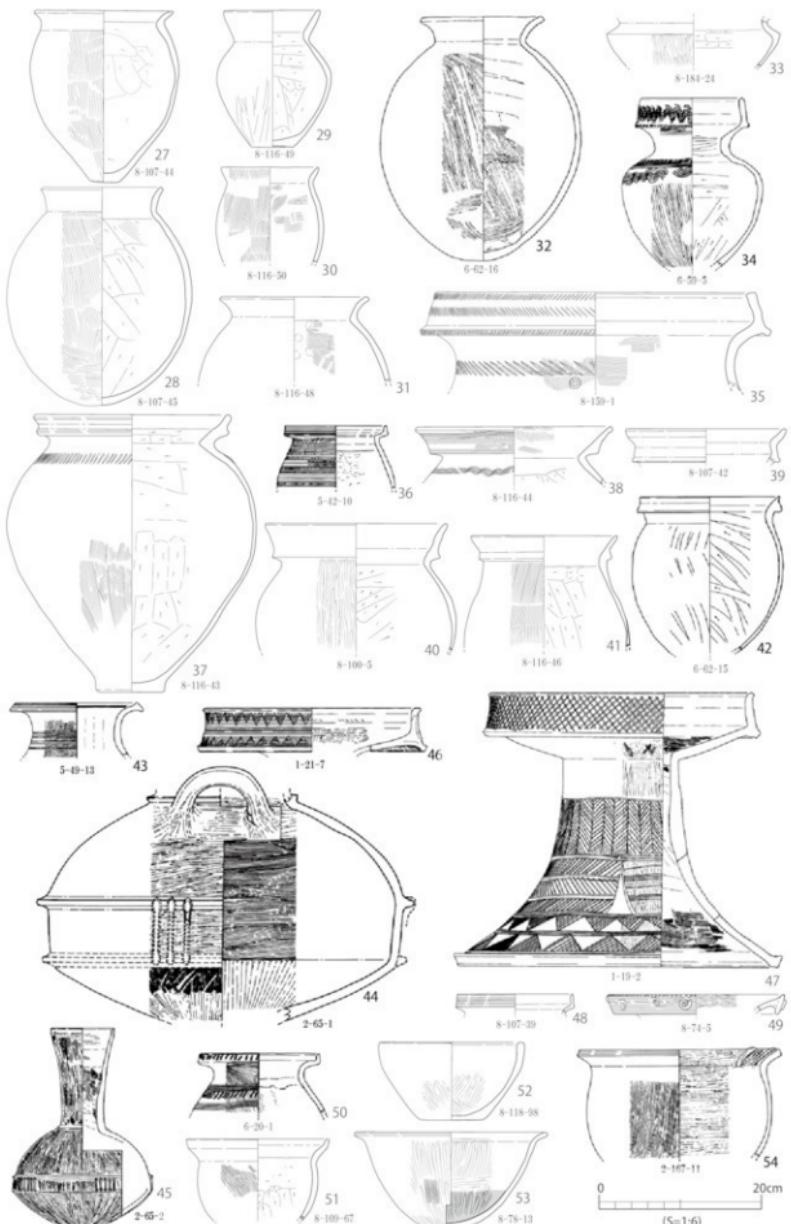
北部九州系（17～21） 17・19・20は6区砂礫層から出土した。17はM字状の突帯を持つ須玖系の甕で、19・20は下大隈式古段階に相当する甕と考えられる。18は袋状口縁を持ち、肩部にノ字状の刺突文を巡らせた甕で、高三瀧式と在地土器との折衷形態と考えられる。3-2区SR03から出土した。21は4区②土器群2から出土した。頸部に突帯を持つ球胴の甕で、底部はわずかに平底である。西新式古段階と考えられるが、口縁部を欠き西部瀬戸内系土器の可能性もある。本遺跡では、今のところ後期後葉以降で明確に北部九州系土器といえるものは見出しづらい。



*細字は報告書・挿図・遺物番号

第 214 図 山持遺跡出土の非在地系土器（1）

0
20cm
(S=1:6)



第215図 山持遺跡出土の非在地系土器（2）

※細字は報告書・挿図・遺物番号

西部瀬戸内系および安芸・備後南部（22～35） 22・23・25・26は西部瀬戸内系の壺で、24もその可能性がある。頸部に突帯を巡らせるものが多く、口縁部が複合口縁のもの（22・23）、大きく外反するもの（25）、短く立ち上がるもの（26）がある。27～31は西部瀬戸内系の甕で、いずれも単純口縁で、胴部内面はヘラケズリもしくはハケ目調整がされ、器壁は在地のものと比べて厚めである。26～31は6区⑥の土器群11や黒色粘質土層から出土したもので、弥生時代後期後葉～前期初頭頃に収まるものであろう。32は長胴気味の甕で、広島湾沿岸に見られる器形で、時期は弥生時代後期末段階と考えられる。33は体部が屈折する鉢で、備後南部の神谷川式との類似性が指摘され、後期前半～中頃のものとみられる。34・35は西部瀬戸内系土器と在地土器の折衷形態である。34は肩部の文様が在地的で、後期後葉頃に位置付けられる。35は鳥取県普段寺1号墳で類似した器形や文様のものがある（米子市史編さん協議会1999）ことから、古墳時代前期に下るもので、西部瀬戸内系の土器が在地化し、山陰地方に広く定着したと推測される。

中国山地系（36～42） 36は塩町式系の甕で、6区砂礫層から出土した。37は口縁部が短く立ち上がり、肩部が張るものである。後期前半に見られるような器形をしているが、6区⑥黒色粘質土層から出土したもので、後期後葉まで下る可能性がある。38～42も6区のシルト層よりも上部で出土したものであり、後期後葉～古墳時代前期初頭頃に位置付けられる。これらは在地のものと比べ、口縁部内面の段が不明瞭で、器壁が厚めである。

吉備系（43～48） 43は鬼川市I式相当と考えられる壺である。6区砂礫層から出土した。44は把手付大型壺で、草田1期後半～2期に併存する。特殊壺の祖形に位置付けられる。45は玉葱型の胴部を持つ直口壺で、44と近い時期のものとみられる。46は搬入品と判断される特殊壺で、47は吉備の小型特殊器台の模倣品である。46・47は1区の旧河道堆積層から検出されたもので、47は複数の小型特殊器台模倣品や在地の鼓形器台などと一括で出土しており、草田3期に属する。48は才の町II式の甕で、6区土器群11で出土した。

その他（49～54） 49は口縁部にS字状の渦巻浮文を持つものである。畿内系の広口装飾壺か、丹後地方にみられる器台の可能性があるが、判断はできない。50は受口状口縁の甕で、胎土も在地のものと異なり、近江地方からの搬入品と考えられる。6区⑥砂礫層から出土した。51は口縁部に小さな段を持つ鉢で、煤が付着しており煮沸具として使用されたもので、但馬・丹後地方で弥生時代後期末頃に見られる器形である。6区⑥土器群11から出土した。

52～54は、外面に煤、内面に水銀朱が付着しており、水銀朱精製用の鉢と考えられる。52はボウル形のもの、53は口縁部が外反するもので、同様の器形で片口を持つものもある。54は、片口のかわりに粘土紐を口縁部に貼り付け、注ぎ口を作り出している。出土層位・遺構から、52・53は弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭頃に、54は後期前半頃に位置付けられる。こうした器形のものは從来の在地では見られないことや、水銀朱の原料である辰砂は出雲地方では産出されないことから、これらは辰砂產出地、もしくは產出地と出雲地方とを介在した地域から伝わった（影響を受けて製作された）ものと推察される。

以上を整理すると、

- ①朝鮮半島系の土器は、弥生時代中期後葉～古墳時代前期初頭を通じて出土しており、この間、何らかのかたちで半島とのつながりを保っていたと考えられる。
- ②楽浪土器・三韓土器はいずれも短頸壺で、運搬用の容器として搬入された可能性がある。

- ③北部九州系の土器は後期中葉までは存在するが、後期後葉～末頃になると不明確になる。
- ④西部瀬戸内系や中国山地系の土器は後期後葉以降に増加し、貯蔵具のほか煮沸具も見られる。
- ⑤吉備系土器は後期中葉～後葉段階に祭祀用の特殊土器の搬入や模倣品が見られるが、後期末以降は少なく、甕など日的な用途の器種はわずかである。
- ⑥近江系や但馬・丹後系など近畿地方周辺の土器も少數だが存在する。ただし、畿内系のくの字口縁甕はほとんど見られない。
- といったことが指摘でき、地域により土器の入る時期や内容に違いがあることが分かる。今後、出雲地方全体の非在地系土器の様相とあわせて検討することで、弥生時代における出雲の対外交流のあり方やその中の山持遺跡の位置づけがより明確になるものと思われる。 (東山信治)

参考文献

- 甘木市教育委員会 2001『平塚川添遺跡I』
- 甘木市教育委員会 2004『平塚川添遺跡II』
- 瓜生堂遺跡調査会 1973『瓜生堂遺跡II』
- 石川県教育委員会 2004『金沢市近岡遺跡 一平成9～11年度調査の記録一』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1994『金沢市戸水B遺跡』
- 出雲市教育委員会 1996『山持川川岸遺跡』
- 出雲市教育委員会 2006『門前遺跡発掘調査報告書』
- 本島徹治 1994「弥生時代の掘立柱建物における立柱技法—佐賀平野における検出例を中心に—」『牟田裕二君追悼論集』
- 小林達雄・小川忠博 1989a『縄文土器大観』1 小学館
- 小林達雄・小川忠博 1989b『縄文土器大観』3 小学館
- 小林達雄・小川忠博 1989c『縄文土器大観』4 小学館
- 鳥根県教育委員会 2005『山持遺跡Vol.1』
- 鳥根県教育委員会 2007a『山持遺跡II・III区Vol.2』
- 鳥根県教育委員会 2007b『山持遺跡IV区(Vol.3)』
- 鳥根県教育委員会 2008『里方本郷遺跡 山持遺跡4(5区・7区)』
- 鳥根県教育委員会 2009『山持遺跡 Vol.5 (6区)』
- 鳥根県教育委員会 2010『山持遺跡 Vol.6 (4, 6, 7区)』
- 鳥根県教育委員会 2011『山持遺跡 Vol.7 (6区)』
- 千葉 豊 2001「沖田遺跡出土縄文後期土器の編年的意義—崎ヶ鼻式と「椎現山式」のあいだー」『沖田遺跡』邑智町教育委員会
- 千葉 豊 2005「西日本縄文後期土器編年研究の現状と課題」『縄文時代』16 縄文時代文化研究会
- 猪崎一郎 1995「中世後期の貿易陶磁」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 長崎県教育委員会 2002『原の辻遺跡調査事務所調査報告書第24集 原の辻遺跡』
- 中村唯史 1996『山持川川岸遺跡の古環境』『山持川川岸遺跡』出雲市教育委員会
- 奈良国立文化財研究所 1993『木器集成図録』近畿原始篇
- 福岡県教育委員会 2009『蒲船町須遺跡I』
- 福岡県教育委員会 2010『蒲船町江頭遺跡II』
- 福岡県教育委員会 2011『蒲船町江頭遺跡III』
- 前嶋 敏 2007「文献資料からみた「遺棄葬」「墓と葬送の中世」」高志書院
- 松江市教育委員会 2011『後廻遺跡』
- 水澤幸一 2007「浦原遺跡にみる地表葬」「墓と葬送の中世」高志書院
- 柳浦俊一 2000「山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年」『鳥根考古学会誌』第17集 鳥根考古学会
- 柳浦俊一 2003「山陰中部域における縄文時代後期土器の地域性－とくに「中津式」の小地域性について」『立命館大学考古論集』Ⅲ 家根祥多さん追悼論集 立命館大学考古論集刊行会
- 米子市史編さん協議会 1999『新修米子市史』第七巻 資料編 原始・古代・中世